

10 「東日本大震災から5年」そしてこれから

○開催目的

東日本大震災から5年になろうとしています。被災した東北や避難してきた方々とつながる活動が行われる中で、市民の自主的な取り組みによって草の根ネットワーク的な災害ボランティアチームが誕生したり、ボランティア活動を続ける中で東北に移住した方や、避難者を受け入れる活動をされている方もいます。

「東北は復興した」とボランティア活動が縮小していく中で、今も熱心に活動を続けている団体の方々をゲストに、広範囲に渡る東日本大震災関係のボランティア活動を紹介して、新たな活動へとつなげて行きます。

○開催日時

2月13日(土) 14:30 ~ 17:00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：42名（参加者32名、出演者6名、スタッフ4名）

出演者・団体：

佐藤 良子さん（立川・東日本大震災避難者を支援する会 会長）

小野 紀之さん（大田区被災地支援ボランティア調整センター 事務局長）

仙 裕司さん（大田区 縁プロジェクト 会長）

井上 健さん（Cocoro Care for Children 副代表）

能登 春男さん（人の輪ネット 代表）

<一般参加からの報告>

湯前 知子さん（NPO 法人フォトボイス・プロジェクト 共同代表）

○プログラム内容・成果と課題

1 登壇者活動紹介

1) 福島からの避難者支援活動

佐藤良子さん 立川市の大山団地で行われている活動について。孤独死ゼロのコミュニティを大切にした取り組みによって、福島の避難者の皆さんも安心して知らない土地で生活ができている。今までの活動で築いて来た実績を紹介。

能登春男さん ご本人も福島からの避難者として色々な体験をする中で、避難者の子もたちやお年寄りに対するケアが必要と感じ、福島の人たちが交流する場をつくり、現在も広く活動を続けている。福島の皆さんの不安を拭うことや将来のことを考えていくことが大きな課題となっている。

2) 大田区の復興支援の取り組み紹介

小野紀之さん 震災以降、大田区では区内の避難者のケアを始め定期的な交流を行っている。また、宮城県東松島市には災害ボランティア派遣を最近まで実施しており、その関係から「災害時相互応援協定」も結んでいる。この取り組みによって大田区で大災害が発生しても、現地ボランティア活動の経験者が大勢いることで速やかな対応が可能になる。

仙裕司さん 小野さんが紹介した大田区の災害ボランティアに参加して初めての復興支援活動を行った。ご遺体への対応は自衛隊が行っていたが、それ以外のさまざまな活動を通じて、多くの経験をした。何度も東松島市に行く中で現地の方々との交流が生まれ、皆さんに元気になってもらおうとギターを弾いたら大勢の人が集まって来て一緒に歌った。そこから東松島市の皆さんを招待するコラボ企画の「絆音楽祭」も誕生した。

3) 子どものケアを実施する活動

井上健さん 夫婦で精神科医をしており福島の子どもの達の診療をしながらレクリエーション活動なども行っている。飯館村などに行く時は、子どもたちの健康チェックなども行いながら、実際には保護者から話を聴くなどして、重要な大人へのケアも実施している。今までのデータを分析し何ができるのかを検討していきたい。

4) 一般参加

湯前知子さん 東日本大震災で被災した女性の方々が、災害の地やさまざまな場所を撮影し、その写真に言葉を重ねることで自分の思いを少しずつ語り出す取り組みを行っている。写真を見ながら参加者がそれぞれの詩を朗読。

2 登壇者パネルトーク

各団体の今後の取り組みや、参加者へのメッセージを一言ずつお願いした。



<課題>

東日本大震災の復興支援活動にはさまざまな団体や組織が多岐に渡り関わっていることを改めて伝える良い機会となったが、それぞれの活動紹介に長時間を費やしてしまい、当初描いていた、団体同士のコラボレーションが生じる仕組みにつながらなかったのは残念でした。

実行委員会の折に、《ボランティアセンターには登録されていないボランティア活動》を主にプログラムを考えてプレゼンテーションをした時に、《東北の皆さんの声》《子ども》《障がい者》《お年寄り》などマイノリティーな部分も含めた広範囲な皆さんの報告があると良いのでは？という周りからの意見のもと、ゲストを増やして対応したことは良かった点も多いものの、テーマの集約ができずに終わってしまった点は否めません。しかし、このような報告会は最近少なくなっているために参加者には新鮮に映ったり、今後の活動に対するヒントやアドバイスが内包されたプログラムであったとあっていただけたのは幸いでありました。

○参加者の声

- Volume たっぴり。少し考えさせられたのは、近年生活保護法が改正され、扶助費の削減が図られ、原発事故の被災地では調査等が国の責任で行われず、仮設住宅に暮らす被災地の支援は打ち切られてきていることです。行政の限界を把握して、その修正を求める必要があるのだろうと思いました。
- あらゆる視点で団体の方からの生の声を聞くことができ、大変勉強になりました。支援をする中でみえてくる新たな課題を模索していきながら、いろんな方が継続した支援を行っていることを改めて知ることができました。
- 会場いっぱいの方々が参加して下さったことがよかった。また、一部で風化が起こっているが、関心を持っている方が多く、心強かった。それぞれの活動がユニークで、本当に被災者のニーズをくみ取った現場の支援活動を具体的に知った事や、そういう方たちとネットワーキングができる機会を与えてもらったことがありがたかった。
- 日頃、震災についての話を聞くことはあっても、なかなか直接伺うことの少ない視点での話を聞くことができ、大変参考になりました。また支援以前に、自らの足元の不確かさと、備えの不足を実感しました。
- 震災が起きた後に、さまざまな活動で被災者の方達を支援していることにとっても感銘を受けました。

○担当者・記録

《担当》	鈴木 正昭（りすこ〔おおた復興支援活動連絡協議会〕）
	枝見 太朗（一般財団法人富士福祉事業団）
	宮崎 雅也（社会福祉法人 日野市社会福祉協議会）
《運営サポート》	筋 清（運営ボランティア）
	金岡 佐映（運営ボランティア）
《記録》	鈴木 正昭（りすこ〔おおた復興支援活動連絡協議会〕）